

## 雨傘貸します

「週末寸言」原稿 081220

アメリカの小説家マーク・トウエインによれば、銀行とは「傘を晴れた日には貸すが、雨が降り始めたら途端に返せ」というところだそうだ。この年末になってから、サブプライムローンの破綻に端を発した銀行の貸し渋りが相次に深刻化しているようだ。自営業のAさんが青菜に塩のような情けない顔をして現れた。越年金融の工面に銀行を訪れたが貸してくれるどころか、今までの借入金を全額返済するようにと強く迫られたというのである。

「これは貸し渋りではなく貸し剥がしだ」と、Aさんは日頃の紳士ぶりをかなぐり捨てて悲憤慷慨する。それもそのはず、銀行とは「借金をするの無いことが容易に証明できる人だけに借金を貸す機会」のことなのだから。

「当面必要な金額はいくらか」と尋ねてみると、予期に反して大した額ではない。「そのくらの額なら家内に極秘の埋蔵金があるから都合しよう」と提案すると、Aさんは「地獄で仏だ」と巧言令色を

繰り出す。なんのこの程度で仏になれるならお安い御用だ。善は急げ、土砂降りの雨の中、埋蔵金を隠匿しておいた銀行に車を飛ばした。払戻請求書に金額を書いて窓口に出し、待つこと数十分。やがて、呼び出されて印鑑と通帳を持って出頭すると、振り込め詐欺対策のため身分を証明するものを出せ、と言う。そんなものは持っていませんと答えると、自動車免許証でよいと言う。免許証は車の中に置いてあると逆らうと、持って来いとにべもない。

無駄な抵抗と思いながら、「金を預けるとときには身分証明どころかもみ手で受け取っておきながら、引き出す段になると身分証明とはなにごとか！」と凄んでみたが、ダメだと言う。じゃ、名刺か健康保険証なら？と妥協すると、何れも写真が無いからダメ、やっぱり免許証を取って来いと言う。外は土砂降りの冷たい雨。しかも周辺工事中のため銀行の臨時駐車場は移転しているかに遠い。逡巡する筆者の背中に、窓口の行員がのたまった。「お傘なら、一本お貸ししますよ」。

トウエインの言に反して、銀行が雨の日でも傘を貸すことを教えられた瞬間だった。